

メルメ・ド・カションについて

富田仁

1

慶応元年初頭、横濱佛蘭西語學傳習所あるいは横濱表語學所などの名称をもつフランス語の学校が開校した。この学校の所在地は当時の辨天社の北隣りで、現在の横浜市中区本町六丁目附近とみられる²⁾。

高島嘉右衛門は、後年、彼の私塾藍謝堂に触れた文章のなかで、

「維新後已に數年を経たが、學校と稱すべきものは政府の手になれるは僅に一の大學南校あるのみ、民間にも又芝新錢座に福澤氏の塾ありて生徒五、六十人を養成し、横濱辯天地内に通辨傳習所の設ありて四〇人許りの生徒を容るるに過ぎず³⁾」

と、この語学所にも言及している。

ただフランス語の授業が行なわれていたというだけならば、すでに江戸の開成所でそれは始められていたのであり、決して珍しくもなかったが、語学所の場合、フランス人教師による直接授業法によるフランス語教育がフランス政府の協力でなされたことにきわめて大きな特色があつたのである。

語学所の授業がフランス人によって行なわれたことはこの学校の創設理由に深く結びついている。幕府がフランスの陸軍將校団を招いて

軍勢力を強化し、横須賀に製鉄所（造船所）を造るためにフランス人技師を雇入れたりするような状況下にあつては、フランス語に通じる日本人の育成は急務であつた⁴⁾。

栗本鋤雲は、その『匏菴十種』で、語学所創設の事情に触れて、つぎのように記している。

「佛國陸軍教師聘入の件は既に定まりたれど、我國にて佛語に通せし者、僅に鹽田三郎立廣作の二人が箱館に在るの日『メルメデカション』に従ひ受覺へたるのみなるに、而も兩人は英語に通じたるを以て、夫々既に職に就き居れば、教師來るの日必らず啞聾事を授くるの迂緩を免かるべからず、且外國締交の上は、名其語に通ずる者を作りて用に供すべきは條約書既に明文あり、況や師を延て衆生徒に業を授けしむる、悪んそ其語に通ずるを待て、然る後業を受るの理あらんや、於是予『レランロセス』と謀り、其論意に基き、佛國語學傳習所創設せざる可からざるの意見書一編を草し、小栗、淺野二氏に示せしに、二氏一見して至極然る可しと同意し、直に連署して上申せしかば、又忽ち允許あり、見込の通り然るべき地を見立、成る可き丈け簡易に設立する様とて、三人共に其掛りを命ぜられたり⁵⁾。」

Students of the French tongue



横濱の佛蘭西語學校傳習所學生とメルメ・ド・カシオン（中央）のボンチ絵（「ジャパン・パンチ」より）

佛蘭西語學傳習所の設立過程の一端がここに示されているが、文中に登場している日本人の後者二名、フランス人二名、これに栗本鋤雲を加えた計五名の人物がこの語学所の生みの親であり、育成者であった。とりわけ、レランロセスことレオン・ロツシユは第二代駐日フランス公使として対日外交政策を意欲的に押しすすめた人であり、語学所開設には看過することのできない役割を果たした人物である。また、メルメデカシオン、すなわちメルメ・ド・カシオンはこの語学所の中の心的人物として直接運営の任に当たった。彼は栗本とは箱館時代以来の旧知の仲で、語学所の設立にあたっては両者の協力が見事に実を結んだ。

「其の學校の教師といふものは、差詰め佛蘭西公使館の書記官でありましたメルメード、カシオン。是は其の當時有名な人であります。ロセスを補助しまして、非常に外交上勢力のあつた人であります。此の人は日本語にも精通し、又支那語にも精通して居りました。当時外交文書は日本語で假名交りで書いて居りましたがこれを讀み分けて翻譯もしますし、日本語には充分通じて居る人で、なかなか話などは旨い。又漢文なども多少出來たのであります。漢詩なども能く讀み分けることが出來た。此の人は元來が宗教家でカトリック宗の僧侶で、僧の中では今の僧官の方で何と譯して宜しうございますか『アベー』といふものであったのであります。當時佛蘭西の勲章なども持つて居りますし、随分有名な人であります。其の當時、日本では基督教は一概に耶蘇教と稱へて居りましたが、外交官の中に立交つて出ましても、其の僧服を着けて居つては甚だ不便なので、僧服を止めて普通の物を着

て、さうして全く普通の書記官のやうな装ひをして居りましたが、實際は、僧侶であります。此の人が前申上げますやうに日本語にも能く通じて居る。なかなか博學の人でありました。之を直に學校の教師にロセスを選んだのであります。

其のカシオンと云ふ人が、學校の教師のみならず、學校一切のことを其の人に委任した、今日で申しますと丁度校長みたやうなものになつたのであります。併しながら其の當時校長は日本人で別にあつた。川勝近江守などと云ふものが始めの校長で續いて森川と云ふ人が校長になりましたが是は特に校長として横濱に在勤して、學校内に住居して居りました。併しながら是は、學校の經理と生徒の取締をするだけの事で、學問上のことに付いては、少しも干渉しない。學務上のことに付いては専らカシオンと云ふ人が全權を持つて居つて、其の人の自由に任してやらせた……」

以上は語学所第三期の生徒となつた田島應親の談話からの引用であるが、メルメ・ド・カシオンの語学所での役割をきわめて簡略だが適切に述べたものとして注目される。

栗本鋤雲の『菴菴遺稿』（明治三十六年刊）の巻頭に掲げられた年譜に、

「嘉永五年先生卅一歳、先生汽船觀光丸試乗の募に應ぜんとし、御匙法師岡樸仙院の効するところとなり、譜をうく、幾もなく蝦夷移住を命ぜられる。此年六月家を擧げて蝦夷に移る、在住諸士の頭取となる、爾來十年間函館にあり、採藥、藥園、病院、疏水、養蠶等施設の事業多し佛人メルデルカシオンに日本語を教へ、交親を結べり。」

と、カシオンとの関係が記述されている。

カシオンについての数少ない紹介のうち、とくに、神長倉真民著

『佛蘭西公使 ロセスと小栗上野介』の中のその経歴に触れた文章はきわめて重要なものである。

「(一)でカシオンといふ人物を御紹介して置く必要があるが、教法師とある如く、彼は元來がゼスエツト派の宣教師だ。かなり古くから日本に來てゐて、日本語も巧ければ、日本文を讀めるといふロセスにとっては、實にお詔ひ向きの人間だった。日本では、メルモツチ大僧正だとか、メルメドウ・カシオンなどと云はれてゐたが、これも本當はメルメ・デ・カシオン (Abbe Mermet de Caehon) といふのだ。栗本等は和春と書いてゐる。はつきりしたことは判らないが、弘化或は嘉永年間と覺しき項に、佛國海外布教協會 (ミッシン・エトランゼール) から派遣されて支那に來てゐたものだ。支那から日本へ渡つて來る計畫だったらしいが、當時は、そんなことは出來ないから、その中間工作としてひとまづ琉球に渡つた。ここで、日本語を練習しながら、おもむろに内地潜入の機會をまつことにして、ジラール、フェレーといふものと都合三人、琉球は那覇の港に押し渡つたのは、一八五五年二月といふから、安政二年の正月頃の話だ。彼等は那覇の聖現寺といふお寺に止宿して、布教の傍ら日本語の稽古をしてゐる。(中略) 彼は、一旦香港へ引上げて後：安政五年に、今度は條約締結のために派遣されたグロー男爵の通譯として、神奈川まで來てゐる。これが、彼が日本本土を踏んだ始めだ、その時には、すぐ香港へ歸つたが翌安政六年九月に、駐日總領事ベレクール：後に公使に昇任：：

について、再び日本へやつて來た。そしてその年の十一月に函館に去つて、ここではじめて日本にゆっくり腰を据えたのだ。函館には一八六二年：：文久二年の秋頃まで留つてゐた。この間に於ける彼の活躍は、相當のものだったらしい。教會を建て、布教するは勿論のこと、英佛語の教授もしてゐる。

彼の家には在留外人は勿論、日本政府の役人、日本の僧侶なども、盛んに出入したそうだから、社交的にも華々しい活躍をしたらしい。また英佛日對譯の辭典を編輯したり、アイヌ語彙を募集したりしてゐる處を見ると、相當學才もあつた男のやうだ。後日、ロセスが、禮を厚くして彼を公使館に招聘したのも、單に日本語が話せるといふばかりでなく、かういふ彼の學問や、社交的技術を傳へ聞いてゐたからだらう。」

カシオンが箱館に滞在したということは日本仏学史研究上きわめて注目される事柄で、栗本鋤雲、鹽田三郎、立廣作十などへのフランス語教授、さらには『アイヌ。起原、言語、風俗、宗教』(一八六三年)、『佛英和辭典』(一八六六年)の編纂、『養蠶秘録』の翻譯の準備などもこの地で行なわれていたのであつた。カシオンの前述の著述活動については後述することにするが、ともあれ、カシオンのこの箱館滞在はすこぶる意義深いものをもっている。

第二代駐日フランス公使として來日したレオン・ロツシユは、

「メルメ神父は、何故か函館に於ける事業を捨て上海に歸らんとしてゐる處であつた。予は猶豫せず氏に協力を頼んだ處が、氏は、無報酬でなければ公使館の公職に就くことを肯んじなかつた。予は日本語

に堪能にして、且日本の社會組織に通曉せる氏の協力が、此際絶對必要であることを力説してその應諾を求め得た。されば予は氏の爲に、住宅及病院學校を建設する爲に幕府が横濱に於て貸與せる地所の一部を割讓せねばならぬと考へた。然るに何故か前任公使は、メルメ神父に對する不平を洩らし、且つ予が協力者として氏を選定したことに就て、白眼を向けたのである¹⁴⁾。

と、カシヨンの協力の必要を訴えている。これは文久三年（一八六三年）に箱館を去つたあと、一旦江戸に出てから、日本を離れ、元治元年（一八六四年）三月二十七日のレオン・ロツシユの赴任に随行して再度日本の地を踏むに至る事情を述べたもので、その後、カシヨンは公使館付通訳官として幕府との外交の場でおおいに手腕を揮うことになつたのである。

カシヨンが元治元年七月四日、横濱鎮港談判の席上、旧知の栗本鋤雲と再会し、それ以來兩人の關係の親密さによつて日仏交渉は円滑に進んだのであつた。

「此度鑑察に命せられ横濱表立合として詰居る處豈料らんや右カシユン儀も彼國公使付書記官にて同港に居り候故應接の度度面會致し公事終りて舊話に及び其緣故を以て自然公使ロセツにも親敷相成たり：

…15)

鋤雲はカシヨンの再会のことについてこのように記している。また、「砲臺遺稿」でもその再会のよるこびをつぎのように述べている。

「此日予始て四國公使に面したるが、就中佛の譯官は、舊識のメルメットカシヨンにて有りしかば、會談餘互箱館以來契濶の情を序し、

併せて予の榮轉を賀し予も亦彼が膺撰の幸を祝したい。」

カシヨンの滞日中の活動については、一応は上述のように伝えられているが、カシヨンの生い立ちを含めて来日以前と帰国以後の経歴に言及している文献・資料の類はきわめて少ない。カシヨンの生涯は滞日期間の部分をのぞくとほとんどまったく判っていないというのがこれまでの認識であつた。

「Cachon の帰国後の動静については、一八六七年のパリ万国博の當時、一五代將軍の代理として渡仏した徳川昭武の通訳たらんとして『切支丹』なるがゆえにしりぞけられてしまったこと以外ほとんど知られていないが、この辞書の編纂に従つていたことによつて、知的活動の一端を察知できるわけである¹⁷⁾。」

と、高橋邦太郎氏はカシヨンの『佛英和辭典』（一八六六年）について触れられた文章のなかで、このようにカシヨンの帰国後の活動に言及されているが、きわめて曖昧な事柄しか判明していなかつたのである。

もっとも、船山馨氏がその小説『蘆火野』においてカシヨンの帰国後の姿を描いているというような例外もあるが、これはあくまでも創作であつて事実ではない。

たとえば、つぎのような一節など、これが事実であつたならば、カシヨンの存在はもっと広く知られることになつたことだろう。

「私はいま、日本の見聞記を書いているところだ。たんなる一個人の印象記録ではなく、トクガワ末期のフランスと日本の交流についても、書いておきたいことが沢山あるのですね。厄介だが愉しい仕事だ

よ17]

カシオンがパリを訪れた主人公たちに語るこの言葉が事実を語るもので、そのような著作が存在しているとしたら、日仏交渉史上の重要な文献となっているはずであるが、そうした事実はないのである。まして小説のようにカシオンが妻帯したという事実もいまのところ確認されていない。

従来、カシオンの生涯については、滞日中の経歴をのぞいては、ほとんどまったく不明とってよいほど判っている部分が少なかった。来日前と帰国後のカシオンの経歴についてはむしろ不明と云った方がよかつたのである。

今夏、パリの海外布教団を中心にカシオンのそのような不明部分についての調査を試みてみた。つぎにその調査報告を含めてカシオンの生涯を素描してみたい。

2

ウージェヌIIエマニユエル・メルメ、あるいはメルメIIカシオンは、一八二八年九月十一日、フランス南東部、スイス国境に横たわるジュラ山中の一寒村、レ・ブーシューに、アレキス・メルメIIカシオンとマリ・クロディヌを父母として生まれた。教会の記録では彼は誕生と同時にシャヴァン司祭により受洗、同じ聖堂区のクロード・エマニユエルIIボンヌヴィルとマリ……メリメが代父母としてこれに立ち会っている¹⁸⁾。

レ・ブーシューはパイプの産地として知られているサン・クロードから約二十キロ離れたジュラ山中の寒村であり、とりたてて云うほど



レ・ブーシューの教会堂(筆者撮影)

のものがないひっそりした聚落である。小さな教会堂が聚落のほずれに建っているのがカシオンの生地を思わせるにすぎない。バスも通えない僻地であり、サン・クロードからの交通機関としてはわずかにタクシイがあるだけで、それも台数が少なく、ようやく辿りついたレ・ブーシューの地はまさに霧に包まれて教会堂もかすんで立っていた。レ・ブーシューはサン・クロード司教区に属しているが、カシオンはサン・クロードの神学校に学び、聖職者としての生涯を歩み出した。むかしは大修道院の中央に位置していたサン・ピユール大伽藍もいまではサン・クロードの名所となっているが、おそらくはカシオンはその大伽藍脇の僧房に寝起きしたことだろう。

一八五二年七月十一日、カシオンはパリに出て、海外布教団¹⁹⁾に入っている。この海外布教団はパリ第七区バック通り一二八番地にあつて、海外へ多数の宣教師を派遣し、カトリックの布教に尽力している。カシオンは、翌一八五三年五月二一日、副助祭、同年十二月十七日、助祭、一八五四年六月十一日、司祭と替わつて順調に昇進した。そして同年八月二五日には日本に向けてパリを出発している。



パリ海外布教団本部(筆者撮影)

一八五五年二月、カシヨンは二人の宣教師、ルイ・テオドル・フユレ²⁰⁾とプリユダン・セラファン・バルテルミー・ジラルール²¹⁾とともに沖繩の那覇に到着し、やがて松尾という町に住み、日本語の学習に専念した。

「ここで、日本語を練習しながら、おもむろに内地潜入の機会をまつことにし

て、ジラルール、フェレーといふものと都合三人、琉球は那覇の港に押し渡ったのは、一八五五年二月といふから、安政二年の正月頃の話だ。彼等は那覇の聖現寺といふお寺に止宿して、布教の傍ら日本語の稽古をしてゐる²²⁾。」

安政二年(一八五五年)正月は西歴では同年二月に当り、カシヨンの来日の時期は日仏両国の資料では一致をみている²³⁾。カシヨンの日本語学習は急速に深められたが、宣教師としての使命を果たすためにはさまざまな障害につきあつたようである。宗教上の反感から、結局わずかに一名の日本人を洗礼させたにすぎず、翌一八五六年には健康を害したため、静養の必要から香港に渡らなくてはならなかった。

一八五八年(安政五年)、日仏通商条約締結の全権公使としてグロ男

爵²⁴⁾の来日に際し、カシヨンも通訳として同行し、神奈川の地を踏んだ。条約締結後、初代公使デュシェーヌ・ド・ベルクール²⁵⁾と不和となり、一旦香港に戻ったが、翌一八五九年、カシヨンは開港された箱館へ赴任することとなった。上海からロシア艦に便乗し、長崎経由で、十一月二五日箱館に到着し、称名寺の境内に家を借り、司祭館とし、教会堂を建て、塾を作つてフランス語を教え、さらに施療所に満足せず病院をも設立しようとした。

神長倉氏はカシヨンが来日後すぐ香港に戻り、「翌安政六年九月に、駐日總領事ベレクール：：後に公使に昇任：：について、再び日本へやつて来た。そしてその年の十一月に、函館へ去つて、ここではじめて日本にゆつくり腰を据えたのだ²⁶⁾。」とその間の事情を説明しているが、カシヨンの再来日はベルクールに随行というよりもむしろ箱館居留の外国人のための宣教師派遣によるものとみられる。

カシヨンは箱館で幕府の役人だけでなく、当時フランス政府代理領事を兼ねていたイギリスのホジソン領事を含めて箱館在住の欧米各国の領事たちともきわめて好ましい関係を保つたことで、彼の司祭館には在留外人は勿論、幕府の役人、僧侶などで多数出入したようだった。とりわけ、この地で箱館奉行津田正路の命を受けた栗本鋤雲と日仏語の交換教授をしたほか鹽田三郎、立廣作などにフランス語を教えたことは、いうまでもなく日本仏学史上の大きな出来事であった。

また、カシヨンの『佛英和辞典』の編纂やアイヌ語々彙の蒐集などはすべて箱館滞在の成果であった。このような功績がフランス政府の知るところとなつて、カシヨンはレジョン・ドヌール・シュヴァリエ

字勲章を授けられた。(パリのレジオン・ドヌール叙勲局およびパリ古文書館にはとくにカシオンの叙勲の記録は保存されていない)。

一八六〇年七月、カシオンはパリ海外布教団からジラールに代わって日本における同会の長上に任命されたが、これを辞退した。一八六一年に入ると、カシオンは身辺に生命の危険を覚えるような事件に二度も出会った。幕府がキリスト教の日本人への滲透を怖れて布教活動を抑えようとする気配が出てきたことと常時武器を携帯せずには外出できないほど外国人への一般民衆の反感が高まってきたこと、そうした中でカシオンは暗殺の危難に遭遇したのであった。カシオンはこれらの苦境にもめげず布教を続けようとしたが、北国の寒さは彼の健康をむしばんでいった。カシオンは病院設立の計画に失敗し、自分があまりにも独断専行していて、上司の賛同をえていないことに気づいた。彼が箱館の地を去る決心をしたのはこうした事情のためであった。

フランス側の文献では、カシオンは一八六三年に箱館を去り、そのままフランスに戻ったことになっている。『函館とカトリック』によるとそれは「千八百六十三年(文久三年)の夏」のこととされている。

だが、神長倉氏によれば、カシオンが箱館を離れたのは一八六二年(文久二年)の秋頃である。前者の文献には、カシオンはフランスで、一八六三年アイヌに関する小冊子を出版し、翌年再度来日し、数カ月間横浜に滞在し、カトリックの学校建設の可否を検討したと記されている。さらに同年、カシオンは僧職を離脱し、メルメ・ド・カシオンの名で『佛英和辭典』を刊行し、一八七一年頃にニースで死去したと伝えている。

カシオンのこの経歴は日本側の文献のそれとはすこぶる重要な個所で喰違いをみせているのである。

カシオンが箱館を去った時期が一八六二年なのか六三年なのかという点でまず違っている。日本側の資料としては、一八六二年四月四日箱館で書かれたというカシオンの書簡が残されていることで、一八六二年四月には一応箱館にいたことが確認される。「文久二年の秋頃まで留ってゐた」という神長倉氏の説はなにに拠るものだろうか。これが正しいとするならば、カシオンは一八六二年秋には箱館を離れているわけで、そうなるとフランス側文献の「一八六三年」はなにを根拠としているのか疑問となる。たとえば、アイヌに関する書物の末尾に「一八六三年十月二十九日、パリ」という記述があることで傍証されるものの、確証するものは見当たらない。藤田東一郎氏は「メルメ・ド・カシオンは元治元年正月には香港に居たらしい²⁸⁾。」と前出の文章で述べているが、これによると、一八六四年初頭には日本にいなかったことになる。これから推定されることは、カシオンは箱館を去ってすぐ江戸に出て、アカデミー・エトランジェールでフランス語を教授したあと、ひとまず帰国し、パリで『アイヌ。起原、言語、風俗、宗教』の著作を刊行し、ふたたび香港に赴いていたのであろう。いずれにせよ、この頃のある期間、カシオンは香港に滞在していたようである。

ところで、レオン・ロッシュ²⁸⁾がカシオンを公使館書記官に任命したのはその来日、すなわち一八六四年四月二十七日(元治元年三月二十七日)前後の頃である。

「メルメ神父は、何故か函館に於ける事業を捨てて上海に歸らんとし

てゐる處であつた²⁹⁾。」

ロツシユはその手記でこのように述べているが、カシヨンへの協力要請がロツシユの来日直前のことであるとしたら、カシヨンは一八六四年にはまだ箱館にいたことになってしまふ。これはとくにカシヨンが「香港」ではなく「上海に歸らんとしてゐる」時期であつたという記述を問題にした場合の推定であり、ちよつと辻褄が合わなくなる。日本側の文献にしても「文久二年秋頃までここに留つてゐたらしい」と、多分に記述が曖昧で、これもにわかには信じにくい。

ここに小説『蘆火野』の一節を引用することにした。

「この三月に着任したレオン・ロツシユというフランスの新公使に用があつてね、御目付の栗本瀬兵衛（鋤雲）さんと横浜の公使館へ訪ねてゆくと、出てきたのがカシヨン君さ」

「ほう。一昨年の暮れまでここにおいでだったメルメ・デ・カシヨンさんですか」

「そうなんだ。いまは公使館の通詞官をしている……(略)³⁰⁾」

右の会話は武田斐三郎と主人公の河井準之助との間のものだが、レオン・ロツシユの着任が元治元年（一八六四年）三月であること、それより二年まえの暮、つまり一八六二年（文久二年）暮まえまでカシヨンが箱館に滞在したことがそこに言及されている。

フィクションが小説の一つの特質である以上、そのままこの記述を事実としてすべて受けとりにくい、一応の判断の根拠とならないともかぎらないので、あえて引用したわけである。いずれにせよ、カシヨンの箱館滞期間は正確にはつきとめられていないようである。藤

田東一郎氏は栗本鋤雲の業績を調べていき、その過程でカシヨンの關係に言及し、

「そこで栗本がカシヨンと交渉のあつた函館在住は安政五年六月から文久二年七月までの間と、文久三年十月江戸へ歸る直前少しの間とであつた、そして函館に於ける功勞が認められ、江戸に召還され、元治元年、一八六四年には横濱半年詰を命ぜられた……³¹⁾」

と述べている。鋤雲はカシヨンよりも一年半ほど早く箱館に来て、カシヨンが箱館を去る前に北蝦夷樺太巡視のためにそこを離れ、彼不在中にカシヨンは箱館から姿を消しているようである。

カシヨンが再度来日したことは日仏両方の資料とも認める事実であり、その時期も同じく一八六四年であるけれど、詳しい月日は不明である。藤田氏はこれに触れているが、

「ところで彼の佛國公使館入りは、はっきりしないが、ロツシユの赴任は元治元年三月二十四日、一八六四年四月二十七日で、ロツシユと日本へ同行して來たと云ふ説もある³²⁾。」

と、一八六四年に再び来日したことを認めている。

カシヨンはレオン・ロツシユの通詞官としてその才腕を揮うことになり、まず横浜鎖港談判に臨み、そこで栗本鋤雲と再会したのだ。やがて幕府がフランス陸軍の將校団を軍事顧問団として招聘することになったのを契機に、ロツシユの建議で横浜にフランス語の学校を建てることが決まった。これには栗本鋤雲の意見が十分に反映されていたことは、

「於是予『レランロセス』と謀り、其論意に基き、佛國語學傳習所

創設せざる可からざるの意見書一編を草し、小栗、淺野二氏に示せしに、二氏一見して至極然る可しと同意：：³⁴⁾」

という記述にも汲みとれる。だが、ロツシユの建議が実行に移される段階では、フランス側ではカシオンが中心的人物となつて力を添えた。

ところで、横浜のこのフランス語学校は創立事情の特殊性から、純粹なフランス語学校ではなくて、陸軍の將校養成所の色彩を帯びていたことは否めない。

「先づ佛蘭西語に通ずる人を拵へなければいけない、これで佛蘭西語が十分話せるやうな人が出来た時分に、佛蘭西から教師が到着するやうな手順にしなければいけない。それには一つ日本に佛語學校といふものを建て、そこで佛語に通ずるやうになつたならば、それを直に軍人として、今の士官にして通譯をしつゝ、其人達が先立ちで練兵の傳習をして、さうして數個大隊の模範を佛蘭西の教師の指揮に依つて造つて、それを諸方に分けて、あとの多數の兵を傳習して教へて往くといふやうな手續をしなければいけないから、到底是は今直ぐ出来ることではない。どうしても三年と五年の歳月を見て掛らなければならぬことである。就いては其の第一の準備として語學校を建設して、其處で佛語に通ずる青年者を養成する其のことは容易に出来ることであるから、先づ第一着手として、一日も早く、其學校を御建てになつたら如何であるかといふことを、ロセスから注意をした。それは如何にも尤もな話であるからして、早速學校を建てることにしやうといふことになつた。それで其の學校を建てるについて、どういふ風に教へて

宜いか、又教師もどんな人があるか分らぬから、一切のことをロセスに御依頼するから、宜しいやうに學校のことをやつて貰ひたいといふ譯になつたのでございます。それからして其の學校を横濱に設けた、即ちこれが幕府時代に横濱の佛語學校と稱へたのです³⁴⁾。」

のちに陸軍大佐となつた同校出身の田島應親は横濱佛蘭西語學傳習所設立の由来を述べている。この伝習所の創立年月については、大塚武松氏は慶応元年三月六日説をとり、田島應親は慶応元年正月に一回生の入学があつたことを述べていて、明確な年月は判らない。この語學伝習所の内容に関しては前出の西堀昭氏の詳細な研究があるのでここではとくに言及を割愛するが、カシオンが実質上の校長であつたやうであつた。これは學校規則に「和春(カシヨンのこと——筆者註)は學校一切之事を關轄す³⁵⁾」とあることからほつきりしていよう。

最初はカシオンひとりでフランス語の授業をしていたやうであるが、伝習生が増加してくれにつれてそれでは間に合わなくなり、公使館の護衛騎兵曹長のシャルル・ビュランが助力し、さらにアンリ・ヴィヴ、レオン・ブラン、フェルナン・プーセなどのフランス人³⁶⁾が加わり、日本人・鹽田三郎も助教として教員スタッフを構成するまでに拡張されていく。とくに鹽田三郎はレオン・ロツシユの強い要望から加わつたもので、伝習所の事務担当者であつた川勝近江守に宛てたロツシユの書簡(日付不明)に鹽田三郎登用の事情が伝えられている。カシオンに箱館でフランス語の手ほどきを受けた鹽田三郎はカシオンが病いをえて帰国するにあたり、助教として採用されたのであつた。さて、カシオンは横浜の佛蘭西語學傳習所の育成に尽力したが、そ

の在任期間は必ずしも長くはなかつたようである。前述のように病氣のために塩田三郎を助教として呼び寄せて帰国の途についてのであるが、帰国の時期はいつの頃のことであつたのだろうか。

「慶應三年（一八六七年）巴里に開催された萬國博覽會に我國も參加するに決定したので此機會に徳川民部大輔昭武卿を派遣し引続き留學せしむる事としたが、同時に公使として向山隼人正を派遣した。公使の随行は小栗、田邊の諸氏であり、民部大輔の随行は栗本、山高、澁澤（子爵）諸氏の外、賜暇にて歸國する長崎の領事デユリー氏同伴し、慶應三年正月十二日横濱を出帆した。巴里では總領事フルリー・ヘラルド宣教師カシオン専ら民部大輔の爲めに便宜を圖つた³⁷。」

この記述のもつ価値はカシオンが慶應三年（一八六七年）のパリ万国博覽會開催時にパリに滞在していたことを示す点にある。栗本鋤雲は慶應三年六月日本を出発し、同年八月パリに到着、カシオンと再会している。鋤雲はレオン・ド・ロニー³⁸にも会い、カシオンとともにフランス人傭兵による薩長討伐の助言を受けたが、これを断っている。なお、前述の高橋邦太郎氏の指摘とは異なり、『函館とカトリック』などによると、カシオンは万国博覽會で鋤雲の尽力で通訳として活躍したことが述べられている。

フランス帰国後のカシオンの消息を伝える文献としてはこの万国博覽會開催に際しての前述のようなものがあるだけで、鋤雲の『晝夜追録』（明治二年三月刊）はその意味では重要な文献である。

カシオンの明治以後の行動を記すものはいまのところほとんど見当たらない。わずかに『蘆火野』に一八七〇年（明治三年）六月の時点の

カシオンが活写されているにすぎない。

河井準之助夫妻がパリのカシオン家を訪ね、カシオン夫妻と会うところが描かれているのである。だが、これはフィクションである。カシオンの消息は、カシオンが帰国後にパリ海外布教団を離れたこと、パリ海外布教団に残されている記録にはきわめて漠然としたことしかみられない。カシオンは還俗したので、ひよっとすると『蘆火野』のように妻帯したかもしれないが、一八七一年頃にニースで死去していることだけが判明しているにすぎない。ましてカシオンが結婚した事実については不明である。

カシオンの死亡年月にしても、パリ海外布教団の記録では一応一八七一年頃となっているが、海外布教団本部のジャン・ゲノオ³⁹神父が筆者に見せてくれたカードには、ニースで一八六九年か一八七〇年に死亡したと記されていた。つまり、死亡年月日についてははっきりしたことは不明であり、今後の調査にまたなくてはならない。

また、メルメ・ド・カシオンを名乗って著述活動をするようになったのも海外布教団を離れたあとであると、前述の記録には記されているが、カシオンの著作物には一八六三年刊の『アイヌ』を含めていずれもメルメ・ド・カシオンと記されている。パリ海外布教団の記録ではメルメあるいはメルメ・カシオンとあつて、メルメ・ド・カシオンとは書かれていない。これは生地レ・ブーシューの洗札の記録でも同様であつた。

結局、メルメ・ド・カシオンの生涯を完全にはたどれない。彼の伝記を綴るに足る資料は十分でないというのが実状である。

カシヨンの著作としては前述のように『佛英和辞典』アイス。起原、言語、風俗、宗教』および『養蠶秘録』（翻訳）の三つが確認されている。ほかに、栗本鋤雲がカシヨンの聞き書をまとめて刊行した書物があるが、これはカシヨンの著述というような性質のものではない。だが、カシヨンの思想の片鱗を知るには看過できない著述であることは否めない。すなわち、『鉛筆紀聞40』がそれである。

つぎに、カシヨンのこれらの著作に目を通しておきたい。

『佛英和辞典』は、その冒頭にレオン・パジエスの前書きが掲げられているが、それによると、一八六六年に第一分冊を出し、翌六七年には第二分冊というように数冊にわたって出版する予定であったようだが、実際にはAからEまでを収めたただ一冊の刊行に終ってしまっている。この辞典の刊行にあたっては、日本語に関してはレオン・パジエス、英語についてはA・ル・グラが協力した。パジエスは『日本切支丹宗門史』の著者として知られる日本学者であった。ル・グラはフランス海軍省海図地図書勤務の少佐であった。

高橋邦太郎氏はこの辞書の紹介文でつぎのように述べている。

「この第一巻は、28cm×18cm 四四〇ページ、AからEまで約六五〇〇語を収めている。最初に一ページのAvis preliminaire「凡例」をパジエスが書いている。

この大意は――

約十二年、日本に滞在したカシヨンが Mehurst, Siebold, Hoffman,

Gochkevich, および堀達之助が一八六二年に江戸で刊行した“Pocket

Dictionary of the English and Japanese language”を Jesuites の神父がポルトガル語から訳した和英辞書二種を参考として編纂した。

この書には、Mamet de Caillon が採用した、和・漢交渾の système について短い説明の要がある。日本語は自体に Syllabique ぶ、口語にせよ、文語には特に、学者が入れた漢語がかなり多量にある。これらの語は独特の文字で書かれ、中国語とはいささか違って発表される。そして、日本の idome に適合している。しかし、句節の構造は日本的である。

こういうように、日本語の特性を列記し、高度の langage には中国語が非常に多い、と述べ、この書の学修に当たって心すべき事項を説いてある⁴³⁾。

カシヨンは「音綴表」としてイロハ四十八文字をフランス語綴のローマ字と並記している。とくに現行のヘボン式ローマ字と異なる文字をあげると、チ tsi, ヌ nou, ル rou, カ ca, ヨ io, ヨ yo, ツ tso, ム mou, ウ ou, キ wi, ク cou, ヤ ia, ヤ ya, フ fou, コ co, ヒ ie, ヨ ye, ニ you, シ si, ス sou, などがみられる。

つぎに「発音表」がアルファベ順に書かれている。これはかなり詳細に記述されているので、いくつかの例だけを見ることにしたい。

A, ア, Aa アアとつうように「ア」音に二様性があること、Bou フ、ブウ Bou にみられるように、後者では軽く母音を繰返すべく U の上にくなるアクセント記号を記して両者の区別を設けていること、Dd ツのように二重子音を伴うことなどのほか、日本語には R

はあるがIがなく、中国語は逆にRがなくしてIがあることなどを説明してゐるが、面白ることと Ha へ、He へ、と、う、う、う、う、 H が、行として発音されてゐる。も、と、も、ホは Fo に改められてゐる。

と、い、ひ、で、本文はまず左側にフランス語が上、英語が下に記われ、その右側に対応する日本語を漢字と片仮名で表わし、下にローマ字で発音を綴るといふふうな記述法で A から始まつてゐる。注目すべきことは、現行の辞書とは内容の密度の違いはあつても一応用例が添えられてゐることである。

一例を記してみよう。

Abimer, v. a.

To cast into an abyss

——, (ruiner).

To ruin.

——, (gâter).

To spoil, to injure.

淵ニ落ス。

Houtini otosou.

破ル。

Yabourou.

破ル。

Sondgirou.

カシヨンの辞書の語彙数は現行の辞書のそれと比べるとやはり少ない。たとえば、大修館の『スタンダード仏和辞典』との語彙の順序をみると、カシヨンの辞書では

A. abaissement, abaisser, abaisser (s), abandon, abandonné,

abandonnement, abandonner, abandonner (s), abasourdir, abâtdir, abâtardir (s), abatis....の順序に続くようにの対して、『スタンダード仏和辞典』の方では

A. aa, ab, abadouiné, abaca, abaisable, abaisant, abaisse, abaisse-langue, abaissement, abaisser, abaisseur (se), abajoue,

abalourdir, abandon, abandonnaire, abandonnateur (rice), abandonné, abandonnement, abandonnement, abandonner, abaque, abasie, abasourdir, abasourdisant, abasourdissement, abat, abatage, abatant, abâtardir, abâtardissement, abaté, abat-faim, abat-foin, abatis, といふ語順で語彙数はずいとい多い。だが、日常生活で頻度数多く用いられる重要な語に関してはカシヨンの辞書に脱落することなく記載されていることは、カシヨンの識見を示すものといえないだろうか。

訳語の問題にしても、高橋邦太郎氏が前出の論考で指摘してゐるように、現在の日本語とは異つたものもあるが、いわば時代色を反映したものとして、今日ではかえつて興味深くかつ重要なものがある。Antichrist 切支丹キライ、Déserteur 逃人、Détenu 牢者、などがそれである。また、Ambre 琥珀、Balcon 欄干などの訳語は今日ではいささか時代色を感じるとはいえ、その訳語の見事さには感心しなくてはなるまい。

村上英俊の『三語便覧』終巻(一八五四年)の「動語」すなわち動詞の項のフランス語の若干のものとカシヨンの辞書のそれを訳語の面では対照してみると興味深いものがある。

abaisser 下ル、置ク、(降ス、減ズル、抑イル、後向ク)——下
abandonner. 見捨ル、癖ル、(捨ル、止ル)——廢棄
abâtardir 症ヲ悪クスル、性ヲ變セル——變性

前者はカシヨンの訳語、後者は英後の訳語で、括弧内はカシヨンが用例に使つた訳語である。時代的には英後の方が先行することを考え

DICTIONNAIRE

FRANÇAIS-ANGLAIS-JAPONAIS

A

A, prép.
To.

— aller d'un lieu à un autre.
To go from one place to another.

— vivre à Paris.
To live in Paris.

— être blessé à la tête.
To be wounded in the head.

— c'est à vous de parler.
It is for you to speak.

Abaissement, n.
Lowering; falling; taking down.

— volontaire.
Self-abasement.

Abaisser, v. a.
To lower; to bring low.

— mettre en bas.
To let down.

ニ。方。へ。向。
Ni: hōni; ie; outkini.

一。所。へ。向。行。
Hitotsouno tocoro iori tocoroni ioucou.

三。三。在。
Parisni dzai-kiō sourou.

頭。部。に。傷。を。受。
Atama ni kizzou-o fiki-oukerou.

大。致。誰。に。言。可。有。
Sorewa anatan made iou becou arou.

下。降。事。下。降。事。
Chitani otkirou coto; sagarou coto.

自。謙。事。
Mizzoucara heri-coudarou coto.

下。ル。田。
Sagherou; ocou.

降。
Orosou.

なくてはならないが、両者とも一応適当な訳語を見出ししているようである。もちろん abataridr は『スタンダード仏和辞典』では「退化(墮落)する」という訳語がつけられている。その意味では、カシヨンも英俊も、必ずしも正確な訳語を採用しているとはいえないが、両者を比較すると、カシヨンの方がやや適訳に近い。カシヨンの場合、実はパジェスが日本語の部分を協力したので、兩人の合作ともいえる訳語であったが、英俊にくらべると、フランス語の意義については雲泥の差がみられるほどの理解をみせていようと、訳語としての日本語についての理解となると、その表現においては英俊には及ばなかったわけで、その限りでは二つの辞書にはそれぞれ一長一短の譏りをぬぐえないものがあつた。だが、これらの辞書がそれぞれ異つた編纂方針にのつとつていた事実を見落してはならない。英俊は発音をカナで表記して後進の学習者の便を計つたように、あくまでもフランス語の学習に役立てることを意図したのであるが、カシヨンは、高橋邦太郎氏によれば、「仏語によって日本語を知り、学ぶ者のため、ということとを目的として」編纂にあつていたのである。

この辞書の編纂が箱館において準備されたものであることは前に述べた通りであるが、箱館時代の著作とみられるものにアイヌに関する前述の書物『アイヌ。起原、言語、風俗、宗教』(一八六三年)がある。この書物については、従来とくに紹介されることがなく、西堀昭氏「アイヌ語小辞典(未見・刊年等不詳)」と前出論文の註に記されているくらいである。が、その『アイヌ語小辞典』とはおそらくはこれを指すものであろう。今夏、パリ国立図書館蔵の『アイヌ。(以下略)』

る閲覧する機会をもつたが、わずか二十ページの小冊子である。末尾の記載によると、一八六三年十月二十九日パリで脱稿されている。この書物はアイヌの種族の脱明に始まり、身体的特徴、熊に対する信仰、家屋、食物、婦人の貞節への試練、言語、葬送、漁など、さまざまな分野におけるアイヌの生態を叙述している。

たとえば、アイヌの料理に触れて、カシヨンはつぎのような叙述を行なっている。

「料理はきわめて質素で初歩的である。煮魚か生まの魚、熊の肉、海藻、いくらかの木の根っこ、ミキ(根っこキキの汁)のはいつた酒、ときにはご飯、こうしたものがだいたいアイヌが好んで食べる料理なのだ⁴⁴⁾。」

カシヨンの記述がきわめて具体性に富んでいることは彼自身の見聞がとり入れられているためのものと考えられるが、箱館滞在の副産物としてこのような著作が生まれたのであろう。実際、カシヨンは「ある日、私はあるアイヌの女性にどうして夫の愛情を奪ってしまう恋仇きの女性を探すのに多くの努力をなさるのかと尋ねたものだった⁴⁵⁾」と、アイヌと直接話し合つたことを示している個所がその書物の中にみられるのである。

このような叙述を詳細に検討するとき、カシヨンのアイヌ研究が箱館滞在の記念すべき成果であることに気づかないわけにはいかないのである。

また『養蠶秘録』も、実は箱館とは無縁のものでないことを見落してはならない。カシヨンが栗本鋤雲とはきわめて深い関係をもつた

LES AÏNOS.

SOMMAIRE.

Leur race. — Ils sont Tartares d'origine. — Différence de caractère. — Leur religion. — Leurs habitations. — Aménagement. — Meubles. — Nourriture. — Cuisine primitive. — Habillement. — Habillement des femmes. — Le tabouage. — Sens du tabouage. — Son origine. — L'air des femmes. — L'origine du tabouage chez les Loutchouens. — Polygamie. — Réputation de la femme aïnoise. — Une anecdote à ce sujet. — Comment se conclut un mariage. — Serment. — Cérémonies du mariage. — Épreuve pour la fidélité de la femme. — Affection maternelle. — Naissance de l'enfant. — La grossesse de la mère constatée. — Félicitations et souhaits à cette occasion. — Absence d'école et de littérature. — Tradition. — Le poète inspiré. — Une anecdote à ce sujet. — L'origine des Aïnos. — Opinion des Japonais sur ce sujet. — La langue des Aïnos. — Famille. — *La machine à pleurer.* — *L'entraînement des chiens.* — Le poison *bousson*. — Danger de ce poison. — La chasse. — Chasse à l'ours. — Pêche. — Comment on s'y prépare. — L'île de *Yezo* est poisonneuse. — *Kalm-Awabi.* — L'Otoué. — Fourmis. — L'ense. — *Le sacrifice et l'apothéose de l'ours.* — Sa naissance. — Son éducation. — Discours adressé à l'ours. — Les plans de la femme. — L'outil.

Les habitants des possessions russes sur le grand fleuve *Amour*, les indigènes des *Sagahins*, de *Kamchatka*, des *Kouriles* et de *Yezo*, forment comme une classe de peuple à part, distincte des Tartares, des Japonais, des Coréens et des Chinois. On serait tout d'abord tenté de les faire descendre des Tartares. Malgré la différence assez prononcée entre les traits physiques, malgré surtout la différence de leurs mœurs et de leurs usages.

DE L'ÉDUCATION
DES VERS A SOIE
AU JAPON

Ouvrage traduit du texte japonais de OUEKAKI-MORIKOUMI, par
BERMEY DE CACHON, premier interprète de la légation de France au Japon,
reproduit en italien sur la version française par Isidore DELL'ORO.

SUIVI DES

OBSERVATIONS

sur

La culture du ver à soie au Japon. — La manière de faire la graine d'après le système japonais, et de distinguer les races annuelles des polyvoltines, faites et recueillies sur les lieux par Isidore DELL'ORO, dédiées en signe de profond respect à S. E. M. Léon ROCHES, ministre plénipotentiaire de France au Japon.

Traduit de l'italien par L.-N. Pécoul,
Professeur au Collège de St-Marcellin.


Prix : 1 franc.


SAINT-MARCELLIN (ISÈRE),
J. VAGNON, IMPRIMEUR-ÉDITEUR.

—
1866.

人であったことは前述の通りであるが、鋤雲は「養蠶起原」の一文を『菀菴遺稿』の中に残している。これは箱館における養蚕の起りを叙述したもので、鋤雲の殖産事業への熱意と努力がそこに覗える。この養蚕育成の事実が、カシオンをして日本における養蚕への関心を深めさせたことは容易に想像できる。ところで『養蠶秘録』はカシオンの著作ではなく、上垣伊兵衛守國という十七世紀初頭の但馬の養蚕家の著作『養蠶秘録』(一六〇八年)の翻訳⁴⁾である。

「本書は日本語で書かれているが、まず最初に駐日公使館通訳によってフランス語に訳出、出版された。ついで、その翻訳がイジドロ・デローロ氏によってイタリア語に重訳され、ミラノで印刷に付されるべく彼の兄のところへ送られてきた。

イジドロ・デローロ氏の推挽でこのイタリア語版の仮綴本の一部がサン・マルスラン農業協会に送られて……⁴⁾

と、この書物にはまずその刊行の経緯がサン・マルスラン農業協会々長によって述べられている。コレージュ・ド・サン・マルスランの教授、L・N・ペケールがイジドロ・デローロ⁴⁾のイタリア語訳からさらにL・N・ペケール⁴⁾がフランス語に訳出して、刊行した。この書物はわずかに四十八ページの小冊子で、日本における養蚕の紹介である。一八六五年十月一日横浜にて、というイジドロ・デローロの序文があるが、訳者はレオン・ロッシユの気骨と忠誠への敬意としてこの書物の翻訳を企てたと云い、繭^{まゆ}の取引きが完全に自由であるとしたら、これはロッシユの日本政府(幕府)に対する不断の懇望によるものほかならないと考え、ロッシユへの敬意のために翻訳を試みたのだと

述べている。このようなところに幕末の通商事情の一端が垣間みられて興味深い。

いずれにせよ、『養蠶秘録』の刊行そのものにはカシオンは直接のかかわりはみせないが、まず最初に仏訳の労をとったところにその養蚕への関心の深さをみるわけである。それが栗本鋤雲の養蚕事業に感化されたものであるかどうかはなお検討の余地があるが、箱館において養蚕事業が力を入れられていた事実には容易に結びつくもので、カシオンの箱館でのそれに関する見聞があったことは十分考えられるのである。

なお、栗本鋤雲がカシオンに直接質問して書いた『鉛筆紀聞』などに関しても言及しなくてはならないが、これはカシオンよりもむしろ鋤雲の質問のありかたに問題がある。鋤雲の鋭い質問とそれに対するカシオンの回答の内容については、紙数が尽きたので稿を改めて検討しなくてはならない。(49・10・15)

〔註〕

- (1) フランス語の名称は Collège français japonais だが、日本語のそれは一定していない。
- (2) 西堀昭「神奈川の仏学——幕末——横浜表「語学所」を中心として」四八ページ(「神奈川史談」一五号 昭和四八年三月)
- (3) 「高嶋翁言行録」一七二—一七四ページ(東京堂、明治四一年三月)
- (4) 拙稿「横浜の仏語伝習所」(「明治村通信」一八号 昭和四六年九月)
- (5) 栗本鋤雲「横須賀造船所経営の事」(「菀菴十種」)
- (6) 「田島應親遺談」(「史談會速記録」一七二—一七四号、明治四〇年八月)
- (7) 栗本鋤雲「菀菴遺稿」

- (8) 神長倉真氏『佛蘭西公使ロセスと小栗上野介』(ダイヤモンド社 昭和十年月)
- (9) 鹽田三郎(一八四八——一八八九年)
- (10) 立廣作(一八四五——一八七九年)
- (11) Mermet de Cachon: Dictionnaire français-anglais-japonais, 1866, 『パリ国立図書館整理番号・x 28917』
- (12) Mermet de Cachon: Les Ainos, origine, langue, moeurs, religions. 1863 [パリ国立図書館整理番号・8°Op3]
- (13) Ouekaki-Morikouni: De l'éducation des vers à soie au Japon, 1866 [パリ国立図書館整理番号・SP 5546] など、カシモン(カシモン)の翻訳そのものの所在は不詳。
- (14) 藤田東一郎「幕末の横浜に於ける佛國語學傳習所 栗本鋤雲メモリス・ド・カシモン」『古書通信』一四一——一四二号
- (15) 註5
- (16) 高橋邦太郎「Mermet de Cachon: Dictionnaire Français-Anglais-Japonais, 1866 など」『日本仏学史研究』創刊号 昭和四七年一月
- (17) 船山馨『蘆火野』(『朝日新聞』昭和四七年四月十一日——四八年六月十五日)。引用は単行本(朝日新聞社 昭和四八年七月)ニカシモン。カシモンの生地ノ・レーシエー Les Bouchoux の Vuillermoz 神父が教会の洗礼記録より筆者に筆録してくれたフランス文を掲げよう。Emmanuel Eugène fils légitime d'Alexis Mermet Cachon et de Marie Claudine, né et baptisé le 11 septembre 1828, a eu pour parrain Claude Emmanuel Bonneville et pour marraine Marie (illisible) Mermet, tous de cette paroisse.
- Signé Chavin curé,
- (19) Missions-Étrangères de Paris, rue du Bac, Paris 7^e.
- (20) Louis-Théodore, Furet (1816——1900)
- (21) Prudence-Séraphin-Barthélemy, Girard (1821——1867)
- (22) 註(8)
- (23) フランス側文獻として、Adrien Lannay: Le Memorial de la Société des Missions Étrangères, Tome II, 1916, pp. 446——447 の記載が最も詳しくカシモンの日記である。
- (24) Jean-Baptiste Louis, Gros
- (25) Duchêne de Bellecourt
- (26) 註(8)
- (27) 註(19)
- (28) Léon Roches
- (29) 註(14)
- (30) 註(17)
- (31) 註(14)
- (32) 註(14)
- (33) 註(15)
- (34) 註(9)
- (35) 勝安房『陸軍歴史』
- (36) フランス人教師で Charles Buland, Henri Veuve, Léon Brin, Fernand Poussel などがいた。
- (37) 『日仏文化』新第七輯 一二二ページ。
- (38) Léon-Louis-Lucien Prunol de Rosny
- (39) Père Jean Guenanu.
- (40) 栗本鋤雲『砲臺十種』(九番館 明治二年)所収。
- (41) A. Le Gras,
- (42) Léon Pagès: Histoire de la Religion Chrétienne au Japon depuis 1586 jusqu'à 1651, 1870.
- (43) 註(16)
- (44) 註(12)
- (45) 註(12)参照。なお、鋤雲の「養蠶起原」にはアイヌが「アノイ」と記述されているが、カシモンも Ainos と記している。
- (46) 昭和四九年十月二三日「朝日新聞」朝刊に「洋学二百年」第十回「技

術輸出第一号」として「養蠶秘録」の仏訳の紹介があるが、これは Mathieu Bonafous の訳（一八四八年）の紹介。

- (47) *Mémorial de Saint-Marcellin* (14 avril. 1866) の記事の抜粋文。
Du Vernay aîné, Président de la Société d'agriculture de Saint-Marcellin.

- (48) Isidoro Dell' Oro.

イタリア語訳々題は「蠶の通り」。

Il modo di allevare i bachi da seta al Giappone opera dal testo giapponese di Onéakaki Morikouni, tradotta nuovamente in francese da Mernet de Cachon, etc, e dal francese volta in italiano con analoghe osservazioni da Isidoro dell'Oro e pubblicata per cura della Società agaria di Lombardia aggiunto un trattato sulla scelta coltivazione del Yama-mai o baco della guercia.—Tipografia del pio istituto di Patsonato, Milano 1865, in-8° pp. XII—48.

- (49) L. N. Péconil がイタリア語からフランス語に訳出した。

本稿欄筆後『函館とカトリック』（函館元町カトリック教会 昭和三四年九月）の存在を知り、函館時代のカシオンの動静を伝える記述に接した。だが、帰国後の消息は「記録がなく不明」とあり、一八六三年夏に函館（小稿中では箱館と記す）を去り、一八六七年には日本から完全に離れたことが述べられている。一八六七年正月の徳川昭武の渡仏には一船遅れて出発したとも記されている。ちなみに西堀昭氏はこれを「一八六六年九月頃と推定している」。

なお、パリ国立図書館におけるカシオンに関する文献としては「蠶の通り」なものがある。（ ）内は同図書館整理番号。

- 1) M. de Moges: *Voyage en Chine et au Japon*, 1857—1858.
Le Tour du Monde, 1860 1^{er} semestre. [G. 6188, 6814]
- 2) *Manuel des Associés pour la Conversion de l' Empire*, 1863.
Paris, Libraire de P. Lehielleux. pp. 192, 220, 242. [O^o 171]
- 3) *L' Univers*, 1858, n^o. du déc., 1859, n^o. des 30, 31 août, 4 sept.

[Gr. fol LC² 1368]

- 4) *Annales de l' Association de la Propagation de la Foi*. XXVII. 1855, pp. 453, 462. XXIX. 1857, pp. 296, 304. [8^oH. 100]
- 5) *L'Explorateur*, 1875, 2^e semestre. p. 434, [C. 5860]

——追記——

帰国、メルメ・ド・カシオンについて、*蠶の通り*のような記事を初校々正の出た時点までに発表しつづけた。

- 「メルメ・ド・カシオンのこゝろ」〔図書新聞〕昭和四九年九月七日
「仏人カシオンの伝記を待望」〔朝日新聞〕夕刊、昭和四九年十月七日
「めぐりめぐり 仏訳『養蠶秘録』」〔図書新聞〕昭和五十年一月一日
(49・12・30)